

主要害虫の生態と調査のポイント

：水稲

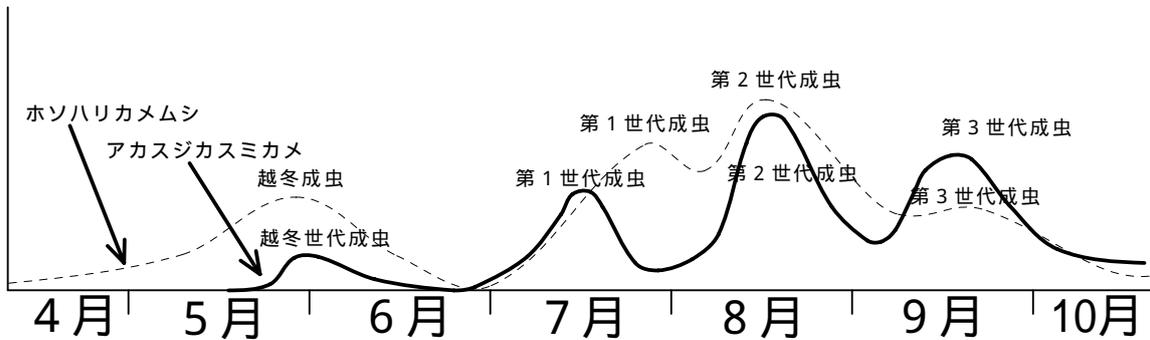
斑点米カメムシ類

生態

斑点米カメムシ類が稲穂を吸汁加害すると、斑点米が生じ検査等級が下がる。

斑点米を発生させるカメムシ類は65種知られており、本県で近年発生が多い種は、「アカスジカスミカメ」、「クモヘリカメムシ」、「ホソハリカメムシ」、「トゲシラホシカメムシ」、「アカヒゲホソミドリカスミカメ」、「イネカメムシ」の6種である。

「アカスジカスミカメ」、「ホソハリカメムシ」、「トゲシラホシカメムシ」は、ほぼ県内全域に、「クモヘリカメムシ」は山間部を中心に、「アカヒゲホソミドリカスミカメ」は東近江、湖東、湖北地域に、「イネカメムシ」は大津市、甲賀市の一部に生息している。



斑点米カメムシ類(ホソハリカメムシ、アカスジカスミカメ)の発生生態

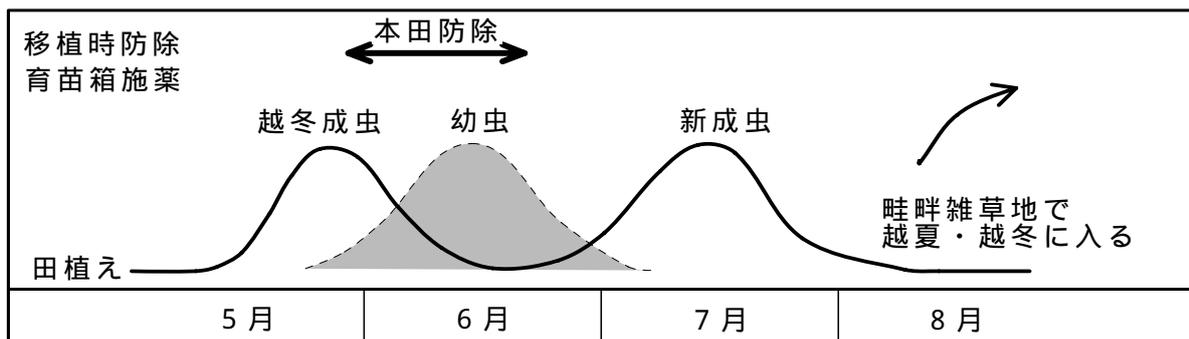
調査のポイント

イネ出穂後にすくい取り調査、見取り調査を実施する。イネ出穂前には水田への侵入は少ないため、出穂したイネ科雑草が繁茂している畦畔や雑草地ですくい取り調査を実施する。

イネドロオイムシ

生態

幼虫は、葉の表面を食害し、幅の広い断続した食害痕を残す。前年の発生量が多いと多くなり、5月の気温が高いと発生時期が早くなる。6月の気温が低く、曇雨天が続くと被害が多発する。



イネドロオイムシの発生生態

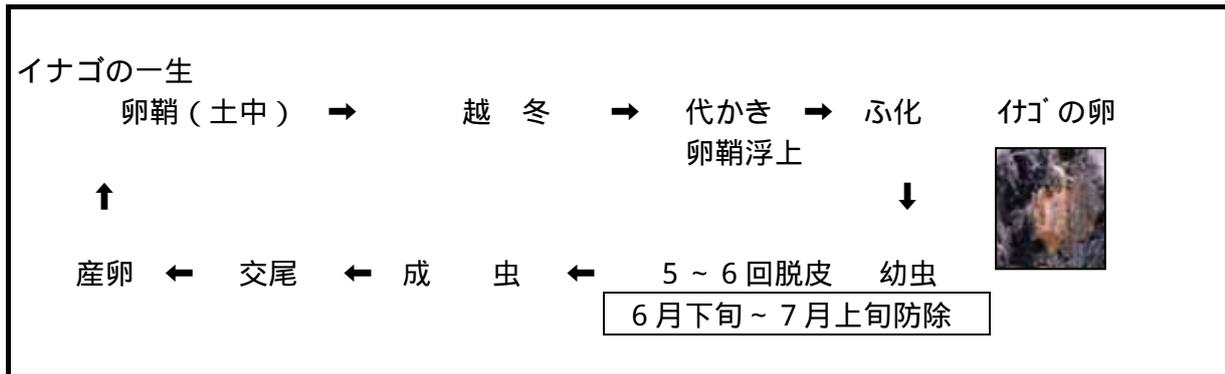
調査のポイント

近年、高島市、長浜市北部での発生が多い。初発は5月下旬から6月上旬である。葉脈と平行に白い太めのカスリ状の傷をつける（イネミズゾウムシの食害痕より太い）。多発するとほ場が白く見える。

イナゴ

生態

5月下旬～6月中旬にふ化し、幼虫が畦畔雑草に集まる。その後本田に飛び込みイネを食害する。



イナゴの発生生態

調査のポイント

発生すれば、畦畔や本田の畦沿いで普通に見受けられる。ここ数年、湖北、高島地域での発生が多い。

イネクロカメムシ

生態

堤防や竹やぶなどで越冬した成虫が、6月中干しが始まる頃に本田に侵入する。本田侵入後にイネに産卵し、第1世代成幼虫も被害をおよぼす。成幼虫が株元で茎を吸汁加害することにより、稲の生育が阻害され、甚だしい場合は出穂しない。

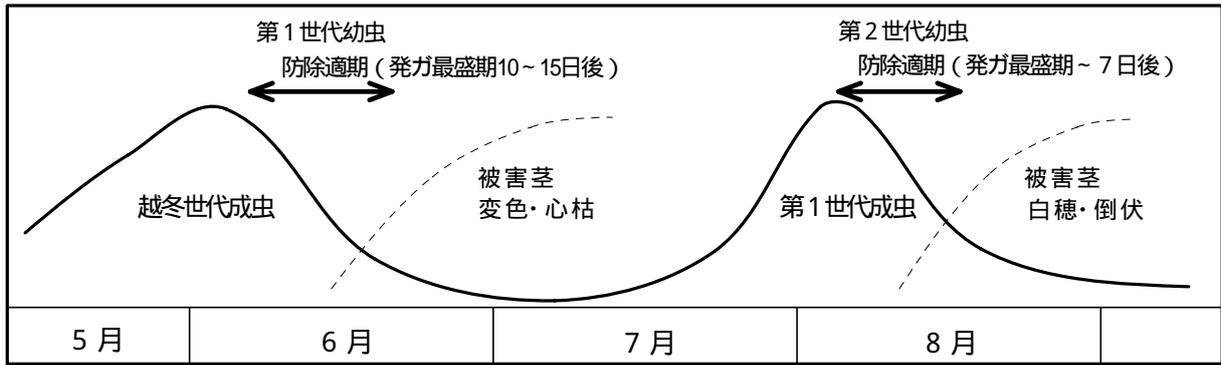
調査のポイント

6月上旬までは水田の畦際に多く生息しているため、被害は畦際に発生しやすい。日中は株元を調査すると発見しやすい。県内では、東近江、湖東地域の山沿い、土手沿いが常発地となっている。中干し以降に心枯れや中間部が白化し折れた葉が確認されれば、株元を調査する。

ニカメイガ

生態

幼虫が茎内に侵入し食害する。年に2回発生し、6月中下旬と8月上中旬に被害がでる。6月下旬の第1世代の被害は、茎が褐変もしくは心枯れ状態となる。8月上中旬の第2世代の被害は白穂になり、被害が多いと倒伏する。



ニカメイガの発生経過

調査のポイント

本県における第1世代幼虫による被害は6月中旬より、第2世代幼虫による被害は7月下旬から8月上旬までに見受けられる。第2世代幼虫による被害は主に心枯れ、第2世代幼虫による被害は白穂となってあらわれる。被害茎や穂を引き抜くと簡単に抜け、被害部に穴や虫糞があるので、他の類似症状との判別ができる。

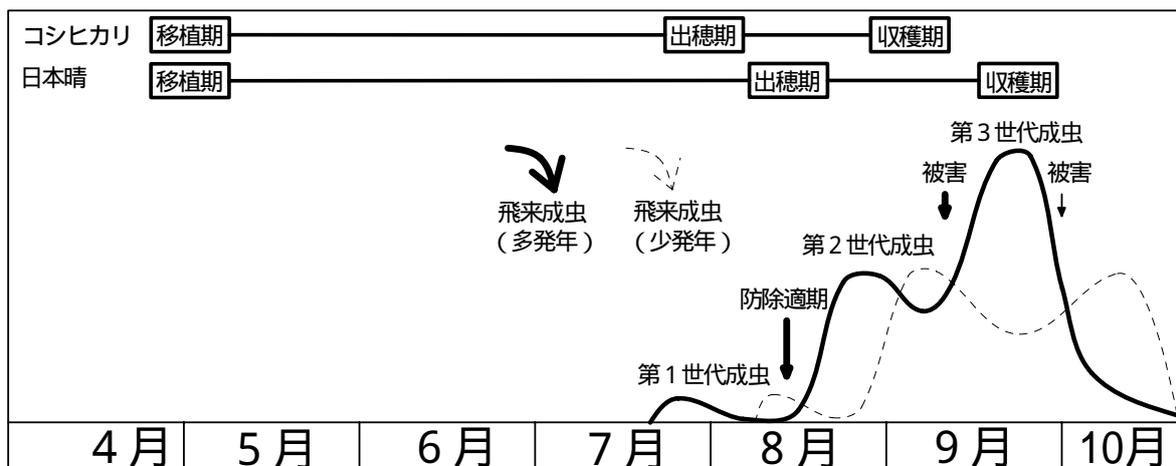
ウンカ類

セジロウンカ・トビイロウンカ
生態

中国大陸から下層ジェット気流に乗って飛来し、世代をくり返し被害をもたらす。国内で越冬することはできない。

セジロウンカは5～7月の成虫飛来が異常に多い場合、第2世代の吸汁やスス病の併発によって被害をもたらす。背中が白いことからこの名が付けられており、7～8月に発生が多くなる。

トビイロウンカは7月以降に飛来し、第3世代まで増殖する。イネの株元を吸汁して「坪枯れ」が生じる。本県では7月上旬までに飛来すれば多発し、8月下旬から9月に被害が発生する危険性が高いので、病害虫防除所が発表する予察情報に注意する。



トビイロウンカの発生生態

調査のポイント

セジロウンカ・トビイロウンカともによく取り調査を実施する。多発時のトビイロウンカは株元に密集するため、払い落とし調査が有効である。

ツマグロヨコバイ

生態

幼虫で越冬した個体が、4月中旬より発生する。水田内に侵入した個体は、稲体を吸汁し、直接的な影響をおよぼす。1株当たり100頭くらいまでは、ほとんど減収せず、200頭で5%前後の減収となる報告がある。

また、ツマグロヨコバイは黄萎病を媒介する。しかしながら、近年本県では黄萎病の発生は、ほとんど認められない。

調査のポイント

水田のすくい取り調査で発生量を確認する。

: 大豆

ハスモンヨトウ

生態

海外または南日本で越冬した個体が、主に7月頃から本県に飛来すると考えられる。約1か月半で1世代を経過する。

大豆では7月下旬以降に、葉裏に産卵された卵塊から数百頭の幼虫がふ化し、2cm程度の2齢幼虫期頃までは集団で加害する。この頃の幼虫の摂食量は少なく、数枚の葉の葉肉部が食害され白化する程度（白変葉）であるが、3齢以降の幼虫は摂食量も多く、分散して葉を暴食する。発生時期が早いと被害の発生も多い傾向にある。

食害時期にもよるが、葉の20%程度までは食害されても収量への影響は小さく、見た目には比べて被害量は少ない。

調査のポイント

葉に産卵された卵は見つけにくく、通常は若齢幼虫の加害による白変葉で被害を確認する。

吸実性カメムシ類

生態

ダイズの子実を加害するカメムシ類は、20種以上が知られているが、本県での主要種は「ホソヘリカメムシ」、「アオクサカメムシ」、「イチモンジカメムシ」の3種である。これらのカメムシ類は、すべて成虫態で越冬し、年間2～3回発生する。

カメムシ類は、若莢期から収穫期まで子実を加害する。莢の伸長期に加害された場合は、莢が黄変し落下するが、子実肥大期に加害された場合は、莢が落下することなく、子実の肥大停止、変形などの被害となる。また、被害莢が多い株は葉の黄化や落葉が遅れ、収穫期になっても青立ちしやすい（ただし、青立ち症状は必ずしもカメムシによる被害とはいえない）。

調査のポイント

8月以降の見取り調査が有効である。

フタスジヒメハムシ

生態

成虫態で越冬し、6月に大豆がは種され、発芽すると集まって葉を加害する。成虫は8月頃まで生存して、土中で根部に200～300卵を産む。卵は、約1週間でふ化し、幼虫は根瘤を食害する。新成虫は、7～8月頃に羽化・交尾・産卵し、9月～10月に第2世代の成虫が発生し、越冬する。

成虫は、発芽直後の大豆畑に侵入して、子葉と葉を食害する。食害された葉には、不正形の円孔が多数空けられるが、枯死することはない。従来は、成虫による葉の食害と幼虫による根瘤の食害が被害とされてきたが、本県ではこれらの被害は軽微である。むしろ、成虫が伝搬するウイルス病によって発生する褐斑粒や、莢表面の食害によって発生する黒斑粒が大きな問題である。

また、成虫が莢の表面を加害することで、子実が小さくなることが報告されており、収量・品質への影響が大きい。

調査のポイント

7月以降に株元に網やプラスチックバットを置き、払い落とし調査するとよい。